



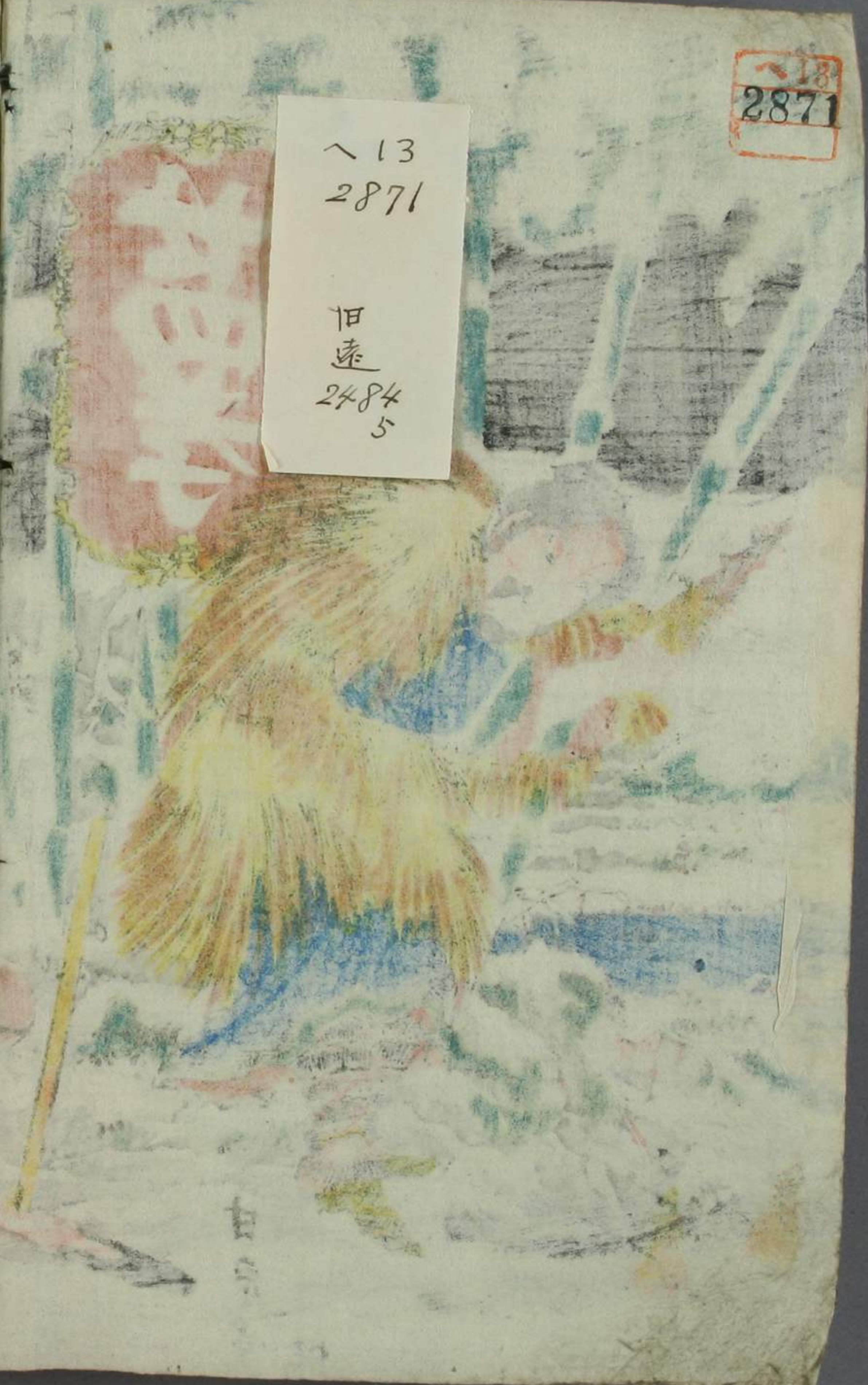
遠
2484

夫孝の百行の基なりと天子より下庶人に至るまで孝を以て本とす
 忠臣の孝子の門小索ひると云う孝經の父子の道は誠小天性自然の道
 ありて親の子を以てらるるも子の親小敬ひ事て孝を守り奉養ま下と
 かり切りの物學ひせんと思ふ若孝道より教へて諺の鳥反哺の
 孝あり鳩の二枝の礼儀ありと云う況や人間に於てや唐國の孝子の
 詩の作の兒童のもの常是を唱歌しと云う其詩古くより梅園の傍で
 是の二十四孝と云上の舜帝文帝と始り下黄香江革が如た小至迄
 貴賤の差別なく其身小施して孝道を及ばし其を重小教の一助と
 甘り然れども其れ小異端を爲す小ありは舜の耕と禽獸の助を以て
 云ふ其徳の過る郭巨が子と拾んとせむと不慈小埋んとす
 て黄金と得る王宗が時を以て諫むと等と求て食さぬと兵猛
 赤鯉やと蚊小苦むと双親の患むる則子鹿の皮とすといて庶民を

廿四孝

2871

へ13
2871
旧遠
2484
5



孝道を然りとするや其の孝子の至誠常の行い志の篤実更
 を以て推して美賞すべきの教より其義を取時神明を
 灵感ありて得て死を得時を食して病を愈す皆是天の道
 外神靈の感得冥助なるの凡慮の及所ありて德行を以て
 克孝道を務むる者ハ神の靈驗必多あり姜詩唐夫人の如き姑
 孝と入せり稀る婦姑勅諭を嫌姑必中あり俗情ること
 急む伊養め孝行あり見女の教の捷徑有り其の虚実の暫措
 て孝子の名千載の美談とす正と姜詩唐夫人の如き姑
 の道中をわける
 筆翰の窓下ふあり

无名翁誌

大舜

有虞氏帝舜姓也姚氏重華
 黃帝の後裔なり
 人々を以て孝の範とす
 舜の徳は天下の主なり
 其の徳の廣くは四海の民を皆育一國を
 安んずるに由りて聖天子の徳は
 人の徳なり
 舜の徳は天下の主なり
 其の徳の廣くは四海の民を皆育一國を
 安んずるに由りて聖天子の徳は
 人の徳なり



帝舜の像

天子の象を飼ひしるはるるの御事
 かくも父母を飼ひしるる御事
 かくも兄弟を飼ひしるる御事
 かくも親を飼ひしるる御事
 かくも師を飼ひしるる御事
 かくも長を飼ひしるる御事
 かくも老を飼ひしるる御事
 かくも病を飼ひしるる御事
 かくも死を飼ひしるる御事
 かくも天を飼ひしるる御事
 かくも地を飼ひしるる御事
 かくも水を飼ひしるる御事
 かくも火を飼ひしるる御事
 かくも風を飼ひしるる御事
 かくも雷を飼ひしるる御事
 かくも雲を飼ひしるる御事
 かくも霧を飼ひしるる御事
 かくも雪を飼ひしるる御事
 かくも霜を飼ひしるる御事
 かくも露を飼ひしるる御事
 かくも雨を飼ひしるる御事
 かくも雪を飼ひしるる御事
 かくも霜を飼ひしるる御事
 かくも露を飼ひしるる御事
 かくも雨を飼ひしるる御事



耕作を助け
 兄弟の御事
 親の御事
 師の御事
 長の御事
 老の御事
 病の御事
 死の御事
 天の御事
 地の御事
 水の御事
 火の御事
 風の御事
 雷の御事
 雲の御事
 霧の御事
 雪の御事
 霜の御事
 露の御事
 雨の御事

天の象を飼ひしるる御事
 かくも父母を飼ひしるる御事
 かくも兄弟を飼ひしるる御事
 かくも親を飼ひしるる御事
 かくも師を飼ひしるる御事
 かくも長を飼ひしるる御事
 かくも老を飼ひしるる御事
 かくも病を飼ひしるる御事
 かくも死を飼ひしるる御事
 かくも天を飼ひしるる御事
 かくも地を飼ひしるる御事
 かくも水を飼ひしるる御事
 かくも火を飼ひしるる御事
 かくも風を飼ひしるる御事
 かくも雷を飼ひしるる御事
 かくも雲を飼ひしるる御事
 かくも霧を飼ひしるる御事
 かくも雪を飼ひしるる御事
 かくも霜を飼ひしるる御事
 かくも露を飼ひしるる御事
 かくも雨を飼ひしるる御事

詩曰
 象を飼ひしるる御事
 かくも父母を飼ひしるる御事
 かくも兄弟を飼ひしるる御事
 かくも親を飼ひしるる御事
 かくも師を飼ひしるる御事
 かくも長を飼ひしるる御事
 かくも老を飼ひしるる御事
 かくも病を飼ひしるる御事
 かくも死を飼ひしるる御事
 かくも天を飼ひしるる御事
 かくも地を飼ひしるる御事
 かくも水を飼ひしるる御事
 かくも火を飼ひしるる御事
 かくも風を飼ひしるる御事
 かくも雷を飼ひしるる御事
 かくも雲を飼ひしるる御事
 かくも霧を飼ひしるる御事
 かくも雪を飼ひしるる御事
 かくも霜を飼ひしるる御事
 かくも露を飼ひしるる御事
 かくも雨を飼ひしるる御事

感動天
 心



感動天
 心

漢文帝

漢文帝 漢景帝の父 漢高祖の孫 漢高祖の太子 漢高祖の太子 漢高祖の太子

天子の母を尊ぶと云ふは天子の徳を尊ぶと云ふ事なり 文帝は母を尊ぶるに孝を盡し 天子の母を尊ぶるは天子の徳を尊ぶるに似たり 文帝は天子の母を尊ぶるに孝を盡し 天子の母を尊ぶるは天子の徳を尊ぶるに似たり 文帝は天子の母を尊ぶるに孝を盡し



文帝は天子の母を尊ぶるに孝を盡し 天子の母を尊ぶるは天子の徳を尊ぶるに似たり 文帝は天子の母を尊ぶるに孝を盡し 天子の母を尊ぶるは天子の徳を尊ぶるに似たり 文帝は天子の母を尊ぶるに孝を盡し



詩曰 孝臨天 漢王 賢母 親嘗

孟宗

孟宗の母は冬に病を患へて
 湯を飲まねば死すべしと
 告げしに孟宗は竹林に入り
 竹を踏みしめて汁を絞り
 母に飲ませしむる事あり
 母は病を癒し孟宗は孝
 行の事として傳へられたり
 孟宗は字は季武と号し
 魯の南陽の人にして三國の
 志に記されし孝子の一人なり
 孟宗の母は冬に病を患へて
 湯を飲まねば死すべしと
 告げしに孟宗は竹林に入り
 竹を踏みしめて汁を絞り
 母に飲ませしむる事あり
 母は病を癒し孟宗は孝
 行の事として傳へられたり
 孟宗は字は季武と号し
 魯の南陽の人にして三國の
 志に記されし孝子の一人なり



孟宗の母は冬に病を患へて
 湯を飲まねば死すべしと
 告げしに孟宗は竹林に入り
 竹を踏みしめて汁を絞り
 母に飲ませしむる事あり
 母は病を癒し孟宗は孝
 行の事として傳へられたり
 孟宗は字は季武と号し
 魯の南陽の人にして三國の
 志に記されし孝子の一人なり

孟宗の母は冬に病を患へて
 湯を飲まねば死すべしと
 告げしに孟宗は竹林に入り
 竹を踏みしめて汁を絞り
 母に飲ませしむる事あり
 母は病を癒し孟宗は孝
 行の事として傳へられたり
 孟宗は字は季武と号し
 魯の南陽の人にして三國の
 志に記されし孝子の一人なり

孟宗の母は冬に病を患へて
 湯を飲まねば死すべしと
 告げしに孟宗は竹林に入り
 竹を踏みしめて汁を絞り
 母に飲ませしむる事あり
 母は病を癒し孟宗は孝
 行の事として傳へられたり
 孟宗は字は季武と号し
 魯の南陽の人にして三國の
 志に記されし孝子の一人なり



孟宗の母は冬に病を患へて
 湯を飲まねば死すべしと
 告げしに孟宗は竹林に入り
 竹を踏みしめて汁を絞り
 母に飲ませしむる事あり
 母は病を癒し孟宗は孝
 行の事として傳へられたり
 孟宗は字は季武と号し
 魯の南陽の人にして三國の
 志に記されし孝子の一人なり

郭巨

後漢の郭巨の事ありて孝

母を養ふに力をつくすに及ばずして

食を儲るやとて其の地を掘りて

金を得て母を養ふ事あり

下りて日ごろの事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

天賜孝子郭巨

官不得奪人

不得取とある事

人もまづいざあや

もまづいざあや

はなのさりのま

郭巨の子とつる

とて母を養ふ事あり

詩曰

郭巨思世給

埋子願母存

黄金天所賜

光彩照寒門



郭巨の事ありて孝

母を養ふに力をつくすに及ばずして

食を儲るやとて其の地を掘りて

金を得て母を養ふ事あり

下りて日ごろの事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

とて母を養ふ事あり

楊香

内田殿と云々... 楊香と云人の事あり年十四... 楊香は孝の極なり... 楊香は孝の極なり... 楊香は孝の極なり...

詩曰深山逢白額

努力搏腥風

父子俱無恙

腹離口口中

此詩結の一章異同あり

脱身絶甲中と書くものあり

白額 暉風 ともふ希のまほ

るる恙へ人を害する事也

昔もあつたるを言ふ事あり

ふあつたるを言ふ事あり

楊香が其所の

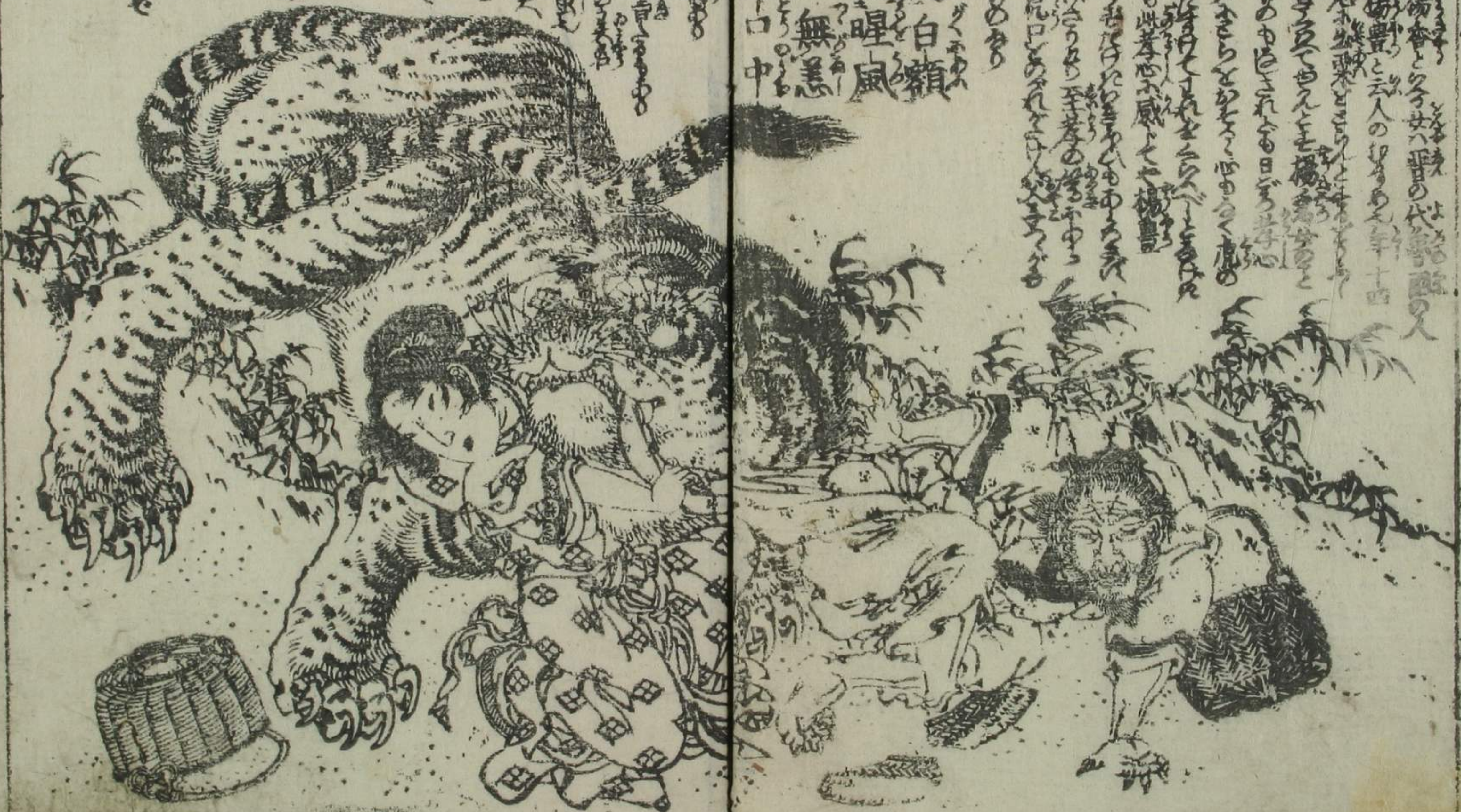
大守孟肇之と云

人との言を言ふ事あり

細敷一楊香の末

あつたるを言ふ事あり

孝かを言ふ事あり



董永

後漢の董永は孝行の
名士と云ふ家傳

少くも三歳は母を養ふれども
野を走らば車馬の音を聞かぬ
母を養ふに力なれば
父死して孝行
正の徳也



主人の孝
一生の徳
孝行の徳
父死して孝行
正の徳也

○新二三人
ついでを
孝行の徳
父死して孝行
正の徳也

孝行の徳
父死して孝行
正の徳也

孝行の徳
父死して孝行
正の徳也



孝行の徳
父死して孝行
正の徳也

曾參

曾參字子思魯國南武城人

曾參字子思魯國南武城人。其父曾皙。曾參少時其父死。曾參事母至孝。孔子嘗曰。吾欲天下一人之孝。曾參而已。曾參少時其父死。曾參事母至孝。孔子嘗曰。吾欲天下一人之孝。曾參而已。

詩曰 母指總方囁 兒心痛不禁 負薪歸未晚 骨肉至情深



王良

王良字子與晉人善射者也

王良字子與晉人善射者也。其父王肅。王良少時其父死。王良事母至孝。孔子嘗曰。吾欲天下一人之孝。王良而已。

詩曰 慈母怕聞雷 冰魂病夜臺



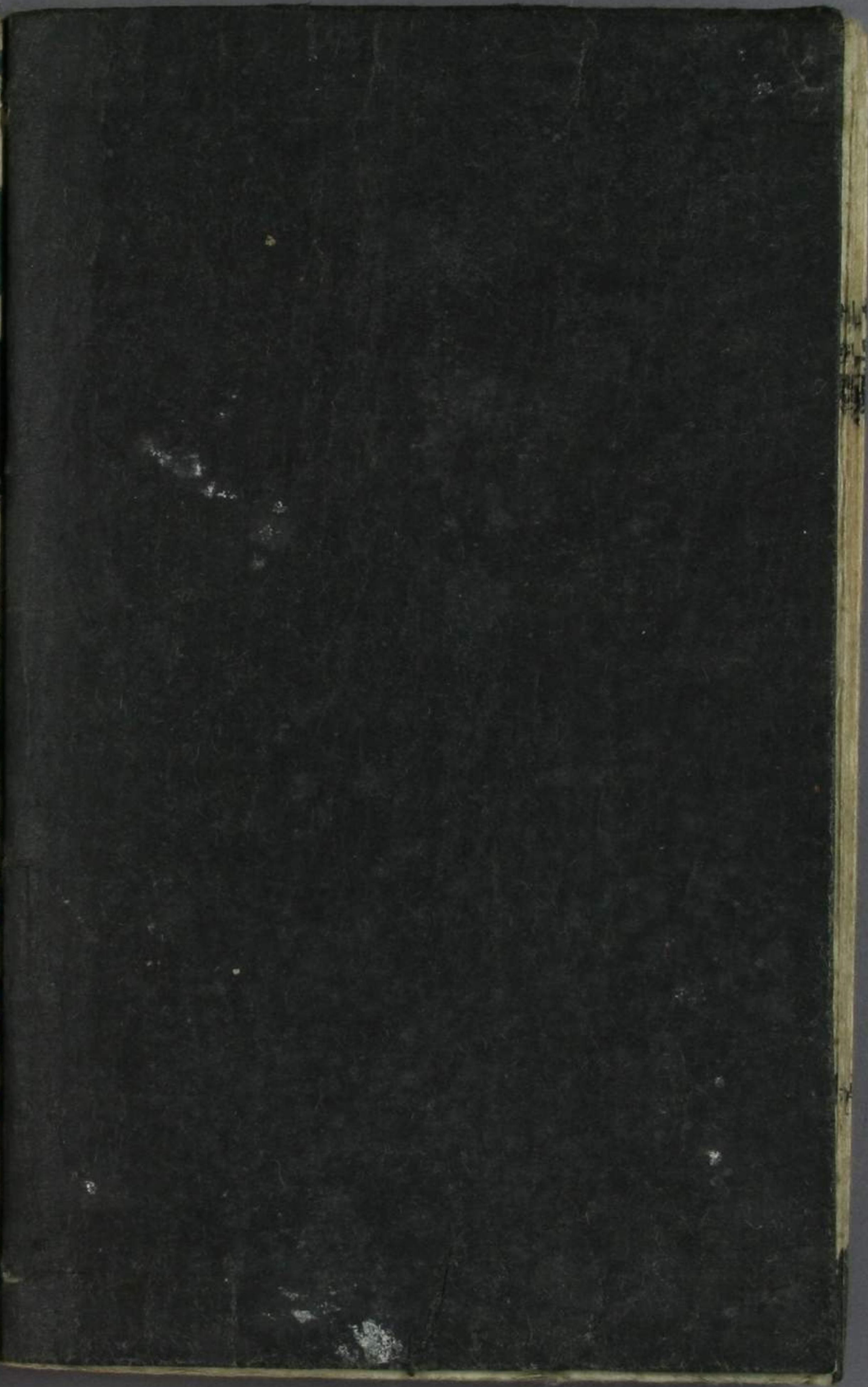
阿香時一兩辰

到墓迴 千回

阿香名

類聚

方



い けん けん けん けん

い けん けん けん けん

い けん けん けん けん

陸 績 常 務

陸 績

陸績の陸績傳の公紀... 陸績は... 母を... 氷を...

謝曰... 孝... 遺母報會館



丁蘭

丁蘭は後漢の代の人なり。親に事し、
二親に事するは、先づ親に事す。孝の至り也。

丁蘭は後漢の代の人なり。親に事し、
二親に事するは、先づ親に事す。孝の至り也。

丁蘭は後漢の代の人なり。親に事し、
二親に事するは、先づ親に事す。孝の至り也。



唐婦人

唐の代の名士の
唐の代の名士の

唐の代の名士の
唐の代の名士の



孝敬崔家婦乳姑
晨盥梳此恩無以
報願得子孫如

老萊子

老萊子の周の
代の八十七

中身は父母の老を憐れむを
ふりては父母の老を憐れむを
ふりては父母の老を憐れむを
ふりては父母の老を憐れむを
ふりては父母の老を憐れむを
ふりては父母の老を憐れむを
ふりては父母の老を憐れむを
ふりては父母の老を憐れむを
ふりては父母の老を憐れむを
ふりては父母の老を憐れむを

詩曰

戲舞字嬌痴春風
彩衣双親用口
喜色滿庭園



閔子騫

閔子の周の
代の子の孝

の其一人を子騫と云ふは
父を失ひては母を失ひては
父を失ひては母を失ひては
父を失ひては母を失ひては
父を失ひては母を失ひては
父を失ひては母を失ひては
父を失ひては母を失ひては
父を失ひては母を失ひては
父を失ひては母を失ひては
父を失ひては母を失ひては

詩曰

子有寒即何曾
娘道前留母
在子免風霜



刺子 周の刺子い加東国の人

眼と必無年... 山崎の... 刺子の...



詩曰 親先思... 山中華...

黄香

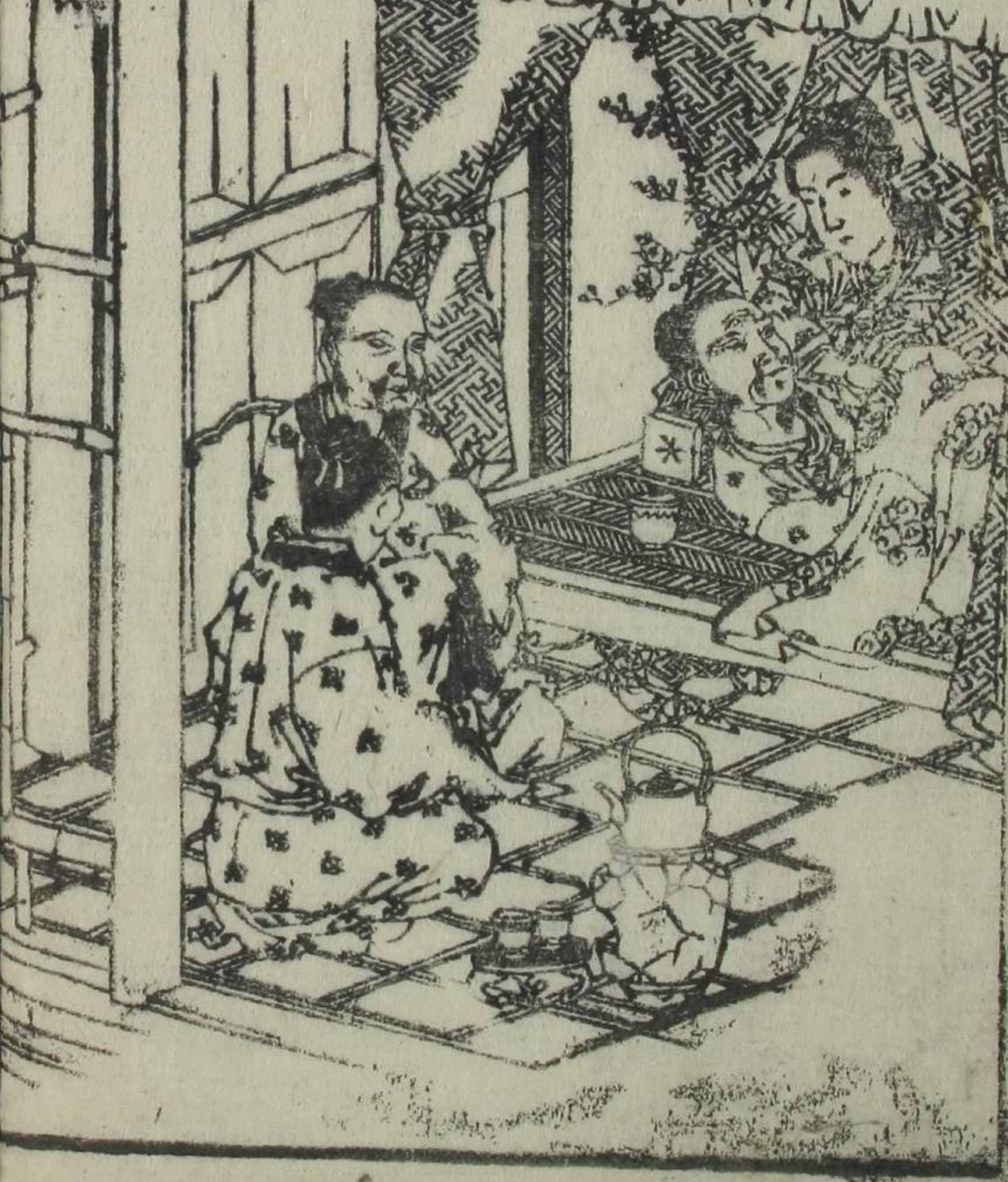
漢の黄香... 父の病を...



詩曰 冬月温塗... 黄香...

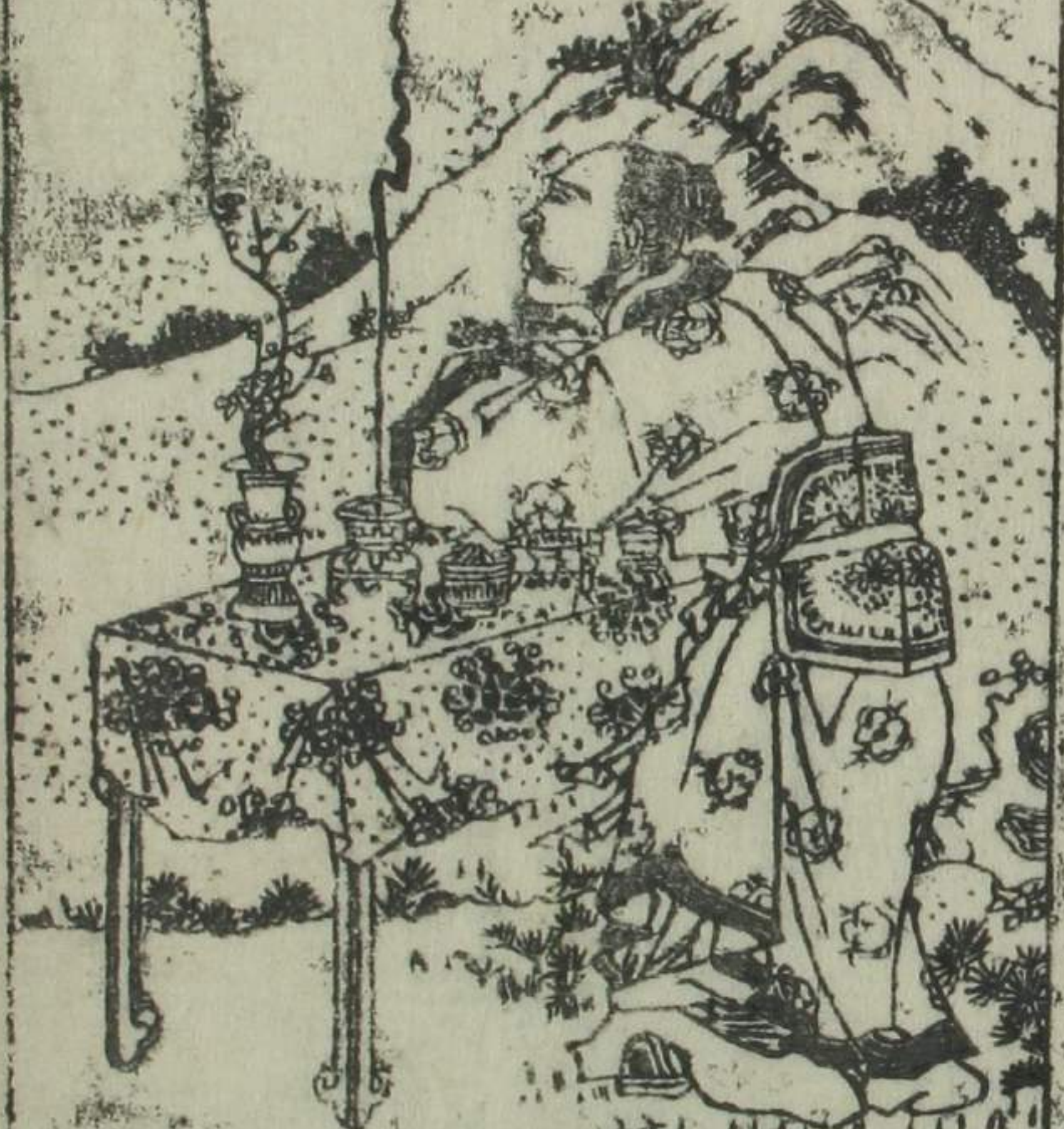
度懸妻

神皇正統記... 度懸妻... 人老長... 名もあはれ... 夫の病も... 官位も... 大抵の... 度懸妻... 人老長... 名もあはれ... 夫の病も... 官位も... 大抵の...



病のつらさを... 度懸妻... 人老長... 名もあはれ... 夫の病も... 官位も... 大抵の...

度懸妻... 人老長... 名もあはれ... 夫の病も... 官位も... 大抵の... 望超...



望超... 疾... 望超... 疾... 望超... 疾... 望超... 疾...

蔡順

漢の蔡順
 汝南の人なり

母を養ふに孝あり
 冬は凍るに耐へて
 夏は暑くても
 常に孝あり
 汝南の人なり
 母を養ふに孝あり
 冬は凍るに耐へて
 夏は暑くても
 常に孝あり
 汝南の人なり



口蔡順の孝あり
 母を養ふに孝あり
 冬は凍るに耐へて
 夏は暑くても
 常に孝あり

蔡順の孝あり
 母を養ふに孝あり
 冬は凍るに耐へて
 夏は暑くても
 常に孝あり
 汝南の人なり

詩曰
 黒楸奉萱園
 啼飢淚滿衣
 赤眉知孝順
 牛米贈君歸



孝の徳あり
 母を養ふに孝あり
 冬は凍るに耐へて
 夏は暑くても
 常に孝あり

黄山谷

黄山谷の横庭に坐す
其の横庭に坐す
其の横庭に坐す
其の横庭に坐す
其の横庭に坐す
其の横庭に坐す
其の横庭に坐す
其の横庭に坐す
其の横庭に坐す
其の横庭に坐す



詩曰

貴顯何天下
平生孝事親
反水清滄海
牌樓世幾人



江草

江草の江草の江草
江草の江草の江草
江草の江草の江草
江草の江草の江草
江草の江草の江草
江草の江草の江草
江草の江草の江草
江草の江草の江草
江草の江草の江草
江草の江草の江草

難免
犯頻
俱獲
以伊
親



江草の江草
江草の江草
江草の江草
江草の江草
江草の江草
江草の江草
江草の江草
江草の江草
江草の江草
江草の江草

張孝 張禮

張孝張禮兄弟二人世同創
禮の志を弟が継いで終つた

張孝張禮兄弟二人世同創
禮の志を弟が継いで終つた
孝の志を弟が継いで終つた
孝の志を弟が継いで終つた

詩曰

偶值綠林兒
代意云瘦肥
人皆有兄弟
張氏古今稀



田園 甲廣 甲慶

田園 甲廣 甲慶
甲廣の志を甲慶が継いで終つた
甲慶の志を甲廣が継いで終つた

詩曰

每底紫珊瑚
春風花滿樹

群芳總不如
兄弟復同居



前より張孝張禮は祭順がまゝに飲もるれば兄弟死をあるを不事を
 して孝の志落し其義を稱するは方々二十四章と省ても可なり且田
 真田廣田慶の兄弟三人を孝志のまゝに親役して右家職
 三人を分るんと云其非義非禮なる思の甚きものなり其物類乃
 田真も人の弟を示して各身と立家とつぎ承く繁栄して先祖の業を
 承る心を用ざる更孝道の立所なく利欲の助ありて二十四章を八
 分の五のあつたればもあつても人々の有るは有るは改るあつるは改る二十六
 章と云ふ東見記に載て毛利拙斎の廿四章孝行録廿四章評松會松平
 四孝誠解其他板の物教書に載て彼も取是を捨てて自ら只兄弟を爲
 孝の教と元立と云ふものあり勸善懲惡の趣意と云ふ事人路て孝の道
 と守りぬべしと見女衆へらうと云ふは終極の助と云ふものなり

東都

書肆

一筆斎英泉補綴並画

甘泉堂 和泉屋市兵衛殿

和泉屋

市兵衛

